

Q8

予防接種をしたにもかかわらず、麻疹に罹った人がいると聞きました。どうしてでしょうか。

A

麻疹ワクチンの接種による抗体陽転率は95%以上で、接種を受けた小児のほとんどが抗体を獲得しますが、数%は抗体ができるに至りません。(primary vaccine failure : PVF)

以前には麻疹をはじめとするウイルス感染症は一度罹ると二度と罹らない終生免疫が獲得されると考えられ、生ワクチン接種の場合も同様に免疫は終生続くと考えられていました。しかし近年、発症を防御できるレベルの抗体が持続されるのは、ワクチン接種後恒久的に野生株の麻疹ウイルスと接触しているためという考え方に変わってきています。近年では麻疹の流行が減少して野生株ウイルスに接触する機会が少なくなってきましたので、ワクチン接種により獲得した免疫が低下して麻疹に罹ってしまう例 (secondary vaccine failure : SVF) が報告されるようになりました。この場合は典型的な麻疹の症状より軽症の、いわゆる修飾麻疹の病態をとる場合が多く、診断には検査室診断 (麻疹特異的IgM抗体の検出あるいは、麻疹ウイルスの分離、麻疹ウイルス遺伝子の検出等) が必要となる場合が多くあります。さらに自然麻疹が減少すれば secondary vaccine failure (SVF) の発生増加が懸念されるため、平成17年(2005)の政省令改正により、平成18年(2006)4月1日から麻疹風疹混合ワクチンが定期接種のワクチンとして使用されるようになり、同年6月2日以降は、2回接種の導入とともに、麻疹風疹混合ワクチンに加えて麻疹ワクチン、風疹ワクチンを定期接種として使用することが再び可能となりました。しかし、平成19年(2007)の流行における麻疹患者のほとんどはワクチン未接種の0~1歳及び10~20代の者と primary vaccine failure (PVF)、secondary vaccine failure (SVF) の10~20代の者が多くを占めました。1歳のお誕生日を過ぎただけで早く1回目の接種(12~24カ月、できるだけ12~15カ月)をきちんと行くとともに、小学校入学前1年間に2回目の接種を忘れずに受けることが麻疹そして風疹対策にもっとも必要なことです。(参照 p24, Q4)

また、平成20年(2008)4月1日から5年間の時限措置で、中学1年生に相当する年齢の者(13歳になる年度)と高校3年生に相当する年齢の者(18歳になる年度)に麻疹風疹混合ワクチン(麻疹ワクチンあるいは風疹ワクチン)の接種が定期予防接種として実施されることになりました。1回もワクチンを受けたことがない人は勿論のこと、幼児期に1回受けたことがある人も、この時期に受けることになりました。この年度の中でも、特に4~6月を重点的接種勧奨期間として、積極的な勧奨が行われています。また、年度末(3月31日)までには95%以上が接種を受けることが目標であり、接種不適当者に該当する者以外は全員受けるように勧められています。なお、定期予防接種対象年齢を過ぎていても、ワクチンを1回も受けたことがなく麻疹にかかったことがない人は、ワクチンを受けて免疫をつけておくことが大切です。